

刊夕e三十二月五



定価 一冊五円
 発行所 常盤宮日新聞社
 印刷所 常盤宮日新聞社

生れかはり

佐田 至 弘

自分の悪いことに気がついたら、そのことを二度と繰り返さない覚悟が大切である。

悔いても、それはあとの祭りであるから、くよくよ思ふ心は、さつぱりと捨てるがよい。

そうすると、似ても似つかず、思ひもよらぬ自分のあることに、気がつくのである。

何ごともそこから始めるがよい。

救かつた氣持も、しめたと思ふ元氣も、これからだとおぼ希望も、面白いと感ずる悦びも、みんな、そこから湧いて来るのである。

きのふの自分をもてあまし、今日の自分を見くびつ

ノート

今年始めての年賀電報の内
 地に於ける発信總数は十四萬一千六百餘通、料金収入は三萬四千四百餘圓たりしてはいけぬ。明日の自分に、大きなのぞみのあることを、ゆめ／＼疑は

ず、今の自分を大切——と心がけるよ。

人間はいくたびも生れかわつて、日に月に成長し、舊い殻から抜け切つた時にけじめて立派な人となるのである。

この世の中には、誰一人として悪い人はないのである。みんな善い人であるけれども、この生れかわりを

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【朝】味噌汁—わかめ
 小付—ぶどう豆

【晝】玉子目玉やき
 小付—やきのり

【晩】カレーライス
 さつま芋—つや煮

悟らず、舊い殻から抜け切るといふ、大自然の法則を忘れてをるから、惱んだり苦しんだりして、身を恨み人を呪ふやうなことになるのである。この世の悪は他から来るのではなくて、それはことごとく身から出た錆なのである。

身から出た錆は、他人にみかいて貰ふのもよいが、所詮は、自分でみがくに、こしたことはない。みがといふことはこする、郷愁への哀歌であつた



春の日記
 文朗作

楽しみや、悦びは、骨折りと痛みの多かつたものほど、強くもあるし、大きくもある。「希望に輝く人生」などといふのは、結局、この心境を通していつたものである。

花咲く野に旋回する熱風のバツシヨンは歌姫の唇は煽情的に色どられ
 狂はしく歌ふ戀歌の階律は春の日の心をくゞ逃避させる
 母の乳房のぬくみを小川の水におぼえる頃ぬく／＼みへの愛着をけつて故郷を去つた友からの便りはめん／＼とした郷愁への哀歌であつた

療治と防豫の



クスリはホシ

「花柳病の防豫と治療法」に関する小冊子あり
 ホシチエンストアに無き時は本社営業部宛御申込あれ無料で送付券附す

花柳病豫防薬

ホシチエンストアにてお求め下さい

ホシチエンストアにてお求め下さい

五、花柳病の防豫に用いる薬の服用に依つてのみ病勢は抑せられる。あれこれと試すに「クスリはホシ」と決め、亡國病の治癒と防豫に萬全を期していただきたい。

●ホシシタロ
 預防の元祖とも云ふべく世に「シタロ」の名を冠しての類似品ありこれにてもその眞價を知らるべし

●ホシコノール
 療病はゴノコケン菌の感染による恐ろべき病疾にて、瘡毒が眼に入ると瘡毒性結膜炎(風眼)を起して失明に至る種である。ホシコノールは尿の分解を抑制してゴノコケン菌の繁殖を制止し又尿に防菌力をもたせしめ尿を清潔にして尿道の炎症を治癒して治癒の目的を達するのである。

●ホシサヨリン
 所謂、潜伏期、第一、第二、第三期の四期に分つ事は周知の事である。そして本病の恐ろしきは、今こゝに永々しく潜伏するを要しないであらう、本病は病菌を速に体外に排泄すると共に健全なる細胞を再生し強壯ならしむる作用を持つものにして「ヨード」を主剤とする一種の變質薬なり。

●ホシペツセル
 本剤は花柳病豫防薬にして、キニーネ類及びオルト酸化ヒノリン硫酸を主剤となし微生体に対する殺滅力が強烈である、然して人體には無害である。

社 會 式 株 藥 製 星 京 東

喜多流謠曲と仕舞の

お稽古を奨め致します

平町田町六九

喜多流 仕舞 白土會

電話一二七番

外科科一般

金成醫院

金成忠義
 平鎌田町(電三五八)

ホシチエンストア平支

脱免の勢で

列車に飛び乗る

改札の驛員がビツクリ

今朝平驛で六時十五分郡山
行列車の改札を初めた際
働者風の若者が「歸るんだ
！歸るんだ！」と大聲を擧
げ物凄しい勢ひで改札口に殺
倒尻込みした驛員に切符も
示さずブリツチを一散に駈
け上つて列車に飛び込んだ
ので係員が追ひ掛け列車が
降さうとしたがボツクス
にしがみ付いて離れず駈付
けた平署員の手で漸く列車
から降り本署で取調ると福
島市一本杉の鈴木重信(三)

藩主夫人を 會長に推す

警備の國防婦人會

警備村にては新たに國防婦
人會の組織準備中であつた
が今回會員三百五十名に達
したので近く盛大な發會式
を擧げ會長に舊藩主内藤子
爵の能婦子夫人を推すと

花札を破き

出刃庖丁を振ふ

懲役五ヶ月を言渡さる

江名町字永崎樂港工事安田
飯塚内土工朝鮮生れ銀徳守
(四)は去る六日午後八時頃
同僚春山文太郎(三)外二名
と賭博の花札を破いた事か
ら喧嘩となり其處にあつた
出刃庖丁を振つて春山の肩
先に突刺し重傷を負した事
件は傷害罪で平白水検事
より懲役一年を求刑された
が今廿三日香西判事より五
ヶ月の判決言渡しがあつた

津田校長來平 伊達
郡梁川小學校長津田達三氏

褒められぬ 學童の齒

平第一小學校は過般全校兒 童の口腔検査を行つたが有 齲人員は全校兒童の八十三 %強を示しその數五十五百 五十五本で一人當り三本強 ありその内最も多いのが第 二乳齒で大部分抜かねばな らないもの許りであると、

は所用の爲め昨廿二日來平
今廿三日午前十時前任平第
二小學校兒童に挨拶した

尙各學年別 重の一般口腔
状態左の如し

△一年	検査人員二〇八
甲四一	乙一六〇 丙七
△二年	検査人員一九三
甲三〇	乙一五八 丙五
△三年	検査人員一八一
甲三四	乙一四四 丙三
△四年	検査人員二〇六
甲五五	乙一四九 丙二
△五年	検査人員二〇二
甲七四	乙一二二 丙六
△六年	検査人員一八九
甲一〇四	乙八三 丙二
△高一	検査人員一四一
甲七七	乙五五 丙一
△高二	検査人員九一

一日掛り

ウナるわ・カむわ

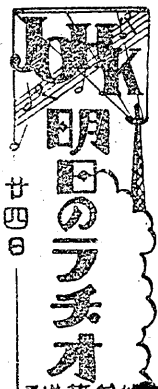
素義連の御愛嬌

中に名士の顔も

平町の義太夫同好者の若葉
會は来る廿五、六の兩日午
後四時から聚樂館に素義
太夫大會を開催師匠鶴澤六
太郎師の糸で大いに大向ふ
を喰らせる趣向で門傳、山
野邊の兩辯護士や井坂醫師
軍司次郎氏、由良之助主人
等今から喉の手當に怠りな
いと當日の出し物左の通り

△初 日

『寶之入舟』入登太夫、『五
郎助住家』花舟(入舟)、『袖
萩祭文』湯本筆嘉平平犬郎
住家、『湯本毒門』まり子、『三
勝半七』佐傳(佐川)、『辨慶
上使』湯本新龜内駒千代
『政岡忠義』宮美幸(涌井)
『本藏下屋敷』錦清(門傳)
『瀧』宮龍清(希山)、『宿屋』



明日のラジオ
廿四日

今晚の部

後六、〇〇 子供の時間
國史物語 大楠公三部曲
三「七生報國」大阪放送童
話劇研究會
後六、二五 「伊達政宗南
蠻遣使事情」小倉博
後七、三〇 講演「殉國志
士横川省三を偲ぶ」檜崎
一良
後八、〇〇 舞臺劇「海戦
甲六一 乙二六 丙四

天 今晩は北西の風
報 明日は南東の風
晴半とす

「子供のややつ」中
前二、〇〇 大楠公史蹟
巡り(第三日)臨地講演
「家庭の大楠公」大佛次郎
後三、〇〇 トーキョー中繼
「メリュー井戸」大阪
ビルメトロ社試寫室より
中繼
後三、〇〇 婦人講座「生
花と盛花」(二)安達潮花
後四、〇〇 小學生の時間
國語「瀬戸内海めぐり」布
田源之助
後三、一〇 教師の時間
「最近に於ける歐洲の國
際情勢」佐藤忠雄
後六、〇〇 (子供の時間)

夫婦共謀して

お目見得詐欺

好間村字權現堂居住坑夫根
本勸次郎(三)は本月一日内
縁の妻大和田キヨ(三)を平
町南町飲食店金澤屋事驚澤
清方に前借百圓で酌婦に住
込ませ一週間目に女を連れ
出した儘家出して居ないと
白を切つて居るので抱主は
平署にお目見得詐欺として
訴へ出た爲め平署で各地に
手配した結果昨廿二日四倉
驛前松ノ下旅館に女中に化
け潜伏中を捕へたと

新算術の取扱 平町
三小學校尋常一年擔任主任
は今廿三日午前八時より植
田小學校に開催の一年生新
算術取扱に關する講習會へ
出席した

好間農會事業

好間
村農會は本廿三日午後一時
から村役場に於いて農事實
行組合長會議を開き本年度
の新事業に就いて協議する

竹藪に潜伏した賊

遂に植田署の手に捕る

植田町字小濱大谷澤義方へ
昨廿二日午前十時頃一名の
賊が侵入し金品を物色中家
人に發見逃走した急報に接
した植田署は直に手配し同
日午後三時裏山の竹藪に潜

寄寓中に 衣類窃取

内郷村大字高坂居住磐炭住
吉鏡坑夫小野谷源助(三)は
本月十日同村金坂の能澤源
次郎方に寄寓中同僚の色部
武所有の衣類九点時價十一
圓餘の品を窃取した事發覺
目下平署で取調中

平商保護者會

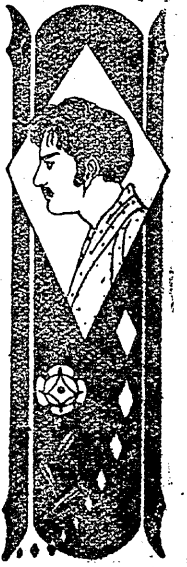
平商
業學校は来る廿六日に一年
生の保護者會を催すと

一册の代金で 御希望通りな

五册の雑誌が 自由に讀める

川崎巡 回文庫

電六三〇番
(申込次第規則書進呈)



明治太平記

(作) 寺島在史
(畫) 野口 画

第三百十回

延寮館夜景 (十二)

やがて、一曲が終ると踊りの群は花の様に四散し、壁際の圓柱の下の椅子へ歸つた。

美女おふくは、其の時重たい振袖を敷物にたらしながら静かにダンス場を出て行つた。

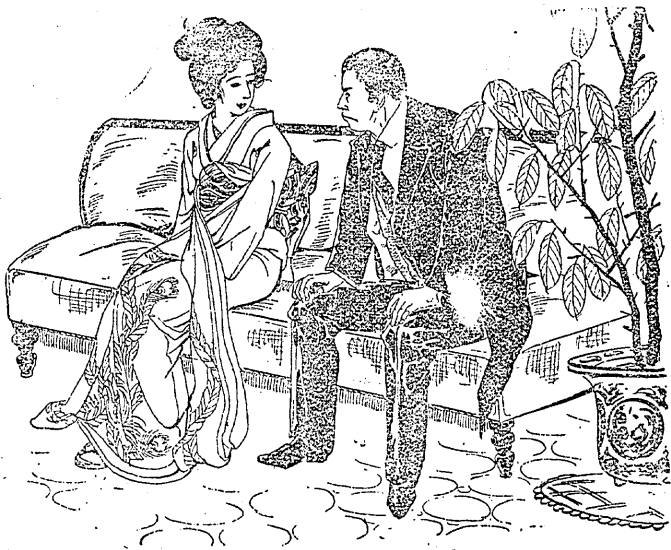
廊下にも、たくさんの人々の視線があつた。それをやはり心に笑殺しながら彼女はやがて休憩室の一つへ入つていつた。

いくつもある休憩室の一つ……それは高貴の人の爲めにつくられたものだが、今では外國使臣や財界の人々まで出入りする事が許されてあつた。

おふくは、人つ氣のない休憩室の片隅にある真紅の長椅子を撰んでつゝ、まさやかに腰をおろした。だが全く室に人の影がないと知るとおふくは急に自脱落に長椅子の上に身を投げ出した……まア、ほんとうに貴婦人なつていやな商賣だわとしておふくは、つぶやいた後で白い歯を見せてひとりでやかに笑つた。

急に又淋しい顔になり何事か獨りつぶやき、そつと溜息を吐くのだった。その淋しい顔、それがまた一段とおふくを美しく見せた。

「わしと話して下さらんか」
「やア、これは失禮」
「どうぞ」
「おふくは大隈を招いた。大隈はのつそりはいつて来て片隅のおふくの腰かけてある長椅子にどつかと腰をおろした。」
「いや失禮」
「軽く頭を下げたがその態度はレデーに對する禮を失してむしろ、なれ／＼しく寄りよめて来るのだった。」
「おびとりで、お淋しさうですな」



早く何んとかしなれば……

其の時扉が靜にノックされた。

おふくは急いで身仕舞を直し、今のさつきのレデーの氣品を見せて室に入つて来る人を迎へた。

江藤ではなく大隈の三角眼

「わしと話して下さらんか」
「どうぞ」
「おふくはしとやかに振袖のつまを合はしてうつむいた。」
「貴女はなかにダンスが達者ですな」
「いえ、どういたしまして……」
「英語も随分御上達のやうですが、どちらで御勉強なされたか」
「おふくの唇に微笑がうかんだ。」
「それで話は一寸とぎれた議論にかけては當路の大官たちのうち、随一と評判されて居る大隈も女との應答には六等出仕のべい／＼官員に劣るのだ。大隈はこれではならぬと三角眼を輝かしへの字の口を再びひらいた。」

△廣告

今年のバラソルの流行は!!!

新人の店 大黒屋洋品店主談

輝かしい新緑と共に初夏の陽も強くなり、御婦人の必需品バラソルの流行は最近ぐんと上り初めました。

「今年の流行は二重張が断然流行界のトップを切り、(生地)はお安い物でボイル表の人絹裏の二重張一寸上物でジョセット表の本絹裏二重張ですが、極上物になりますとレース加工、チック加工、シツユウ加工になつて居ります。」

「型」は昨年同様に骨數が多いので變りなく

にぎり気持長い位です。模様と加工と色は和服の流行と同じく明るい色合が第一で模様は日本趣味の花模様が多く、たゞ學校卒業されたばかり位のお若い方には一重コハク地に原色で強く線を織り出したものなどもすつきりした感じを出します。ので、特に好評です。おいらびになるには自分の個性を生かして顔と眞物の調和性のあるものをおいらびになる事が一番です。さて「値段」はと申しますとほとんど二重張の爲手間が二倍かかるので

製造能力が上らない爲先は品不足で先高とくろうと筋は見えて居りますから早くお買になつた方が安くて良い柄を選ぶ事も出来、御利益かと存じます幸いにも皆様の大黒屋は東京のデパートと専門の製造家の新期契約がむすばれましたので東京デパート其のまゝの安値で御ひする事が出来、事は大黒屋の今年の強みで御座います。全部今年の柄柄は到着致しました。バラソルの御買上には一應大黒屋を御覧になる事が徳策かと存じます。

今年の相場

ボイル二重張	一圓半ヨリ
ジョセット	二圓半ヨリ
本絹	三圓半ヨリ
コハク一重	十圓代
	二圓ヨリ五圓

花柳病の撲滅を提唱す

陽春期を迎へ 徹底的治療が肝要

一、花柳病發生に時期はないが、生物すべてが生體を強くする陽春期が来ると一掃して滅ぶ率が多く、また一度閉息した人でも徹底的な治療を受けるために再發し、人生にとつて樂しかる可き花柳病の毒も、花柳病者にとつては決して愉快なものではなく、人生の幸福を自毀すればする程、その毒氣が遠く一人情熱と暗夜に立つ鬱々を産み、種々の悲劇に誘はれる多くの春である。

二、花柳病の怖しさに就いては何人もこれを無知して居る通り、この疾病は最大に怖く、ある人となつたり、また幸福なる家庭を破滅したり、前途ある身を自ら死を遂げ花柳病から起る悲劇は益々増へる一方で、國家のため河に傾いたくない。

三、本社ではこの怖しい花柳病を徹底的に撲滅せんがため、左記本社製品の全國的大賣出しを行ふこととなつた。我々の花柳病撲滅は長き歴史と、最新の學理に基く研究によつて完成された陽春期であることは一般の認むるところである。

四、近時花柳病の毒多く、醫利主義の安心ならぬ醫藥が市井に溢れて居るが、こうした毒に依つては決して快復を望むことが出来なからず、むしろ毒を更に増やして居るのみである。

花柳病豫防薬

ホシシシク

10 20 50 1.00 2.00